

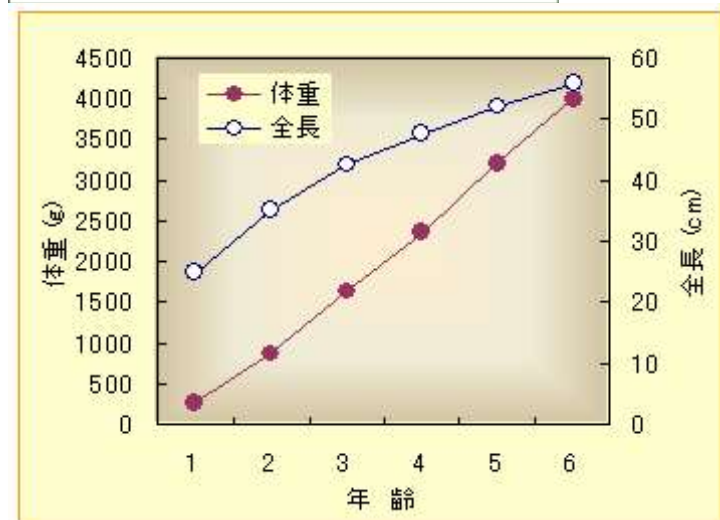
トラフグ *Takifugu rubripes*

日本海西・東シナ海 担当：西海区水産研究所



生物学特性

寿命：	10歳以上
成熟開始年齢：	♂2歳、♀3歳
産卵期：	春季（3～6月）
産卵場：	若狭湾、関門海峡周辺、備讃瀬戸、布刈瀬戸、福岡湾湾口、有明海、長島海峡
索餌場：	日本海西部、東シナ海・黄海
食性：	動物食で、仔魚後期までは動物プランクトン、稚魚は底生性の小型甲殻類、未成魚以降は、エビ・カニ、魚類等
捕食者：	不明



漁業の特徴

主にふぐはえ縄漁業で漁獲されるが、沿岸域では産卵親魚や若齢魚が定置網、底びき網、釣り及び刺網等様々な漁法で漁獲される。

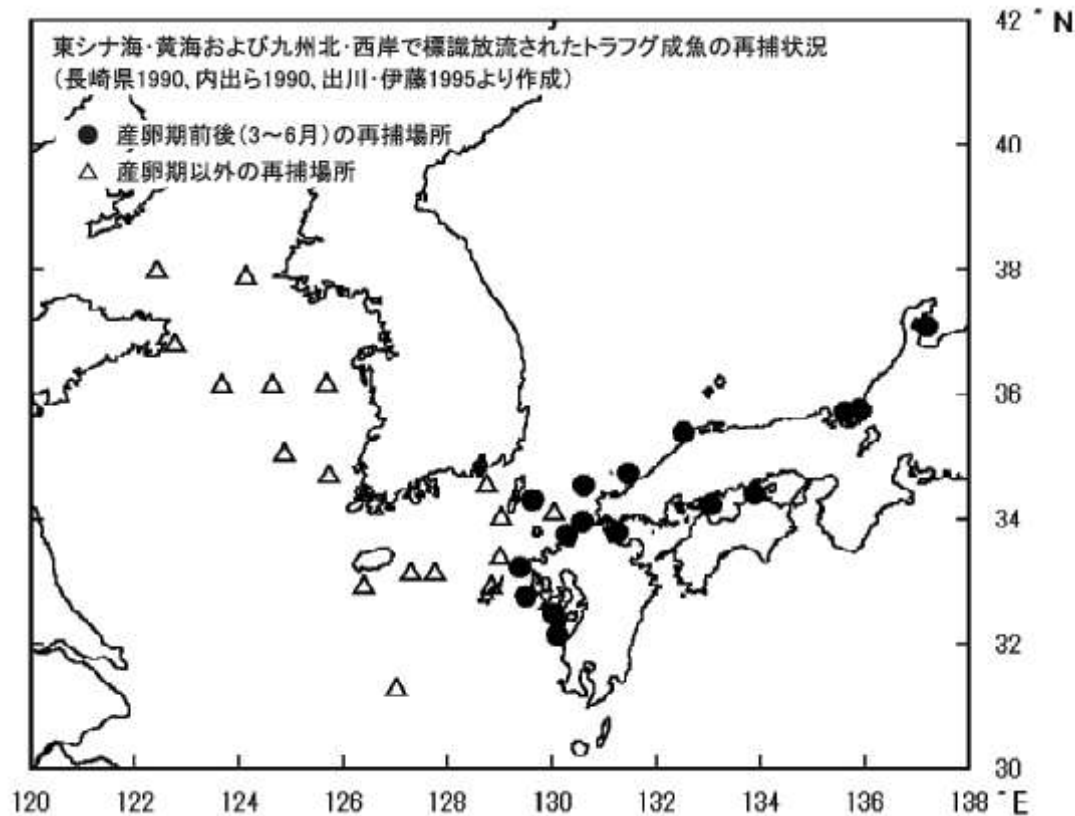
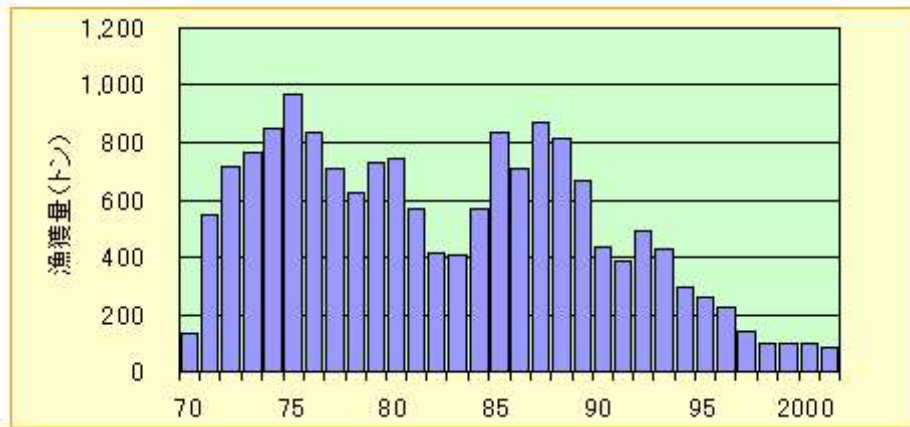
ふぐはえ縄漁場は黄海、東シナ海及び五島灘から山陰に至る日本海であるが、1988年以降は漁獲の減少などから黄海へ出漁するふぐはえ縄船は減少し、近年では我が国EEZ内が主漁場となっている。

沿岸で操業する小型のはえ縄船では、漁期初めのトラフグの漁獲状況により、他の魚種をねらった操業に切り替えるというように操業状況が変化している。

済州島周辺では、韓国はえ縄船による操業も行われているが、詳細については明らかでない。

漁獲の動向

漁獲統計が未整備なため、漁法ごとの詳細な漁獲の動向は把握できないが、フグ類の主要水揚げ基地である下関唐戸魚市場南風泊市場（以下南風泊市場）への水揚げ量の動向によると、盛時に1,000トン近くあった水揚げは、1989年以降減少を続け、1998～2000年は100トン程度、2001年は85トンと低水準である。

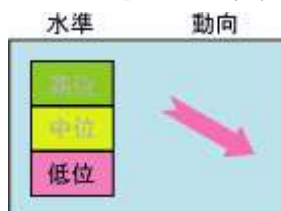


資源評価法

漁獲統計が未整備なため、主要市場でトラフグの7～8割が水揚げされるといわれる南風泊市場の水揚げ量の変動傾向を主体に、産卵群の来遊状況等の情報を加味して評価を行った。

資源状態

東シナ海・黄海及び日本海産トラフグの南風泊市場への水揚げ量は、1975年の970トンピークに1988年以前は400～970トンで推移していた。しかし、1989年以後減少を続け、1998～2000年は1975年の約1/10である100トン程度、2001年には85トンとさらに減少した。各地の産卵場近傍海域において産卵期に漁獲される親魚も1980年代後半から減少しており、近年は盛時の1～2割程度となっていると推測される。これらのことから盛時に比べ資源は極めて低い水準にあると判断された。



管理方策

現在の水準より漁獲を抑えなければ資源はさらに減少を続けると考えられる。資源の回復には主要漁法である延縄漁業のみならず本種を漁獲するすべての漁業において大幅な漁獲の削減が必要で、理想的には全面禁漁が望ましい。しかし、種苗放流が行われ、資源への添加も確認されていることから、放流による補填分を除いた漁獲を削減する。最近5年（1997～2001年）の南風泊市場水揚げ量に占める放流銘柄の割合は平均で13%程度であるので、過去最低のレベルとなった2001年の漁獲量（南風泊水揚げ量からの推定）に0.13を乗じてABCを算定した。

	管理基準	A B C（トン）	漁獲割合	F 値
A B C limit	0.13 Ccurrent	14	—	—
A B C target	0.8 A B C limit	11	—	—

資源評価のまとめ

- 南風泊市場への水揚げ量は盛時の1割に満たない
- 1998～2000年は100トン程度で横ばいであった南風泊市場への水揚げ量は、2001年にはさらに減少した
- 各地の産卵場に来遊する産卵親魚もかつての1割程度で、産卵親魚量も減少している
- 禁漁が望ましいが、種苗放流効果もあるためABC算定にはこの添加分を考慮

管理方策のまとめ

- トラフグを漁獲しているすべての漁法に対して、大幅な漁獲制限が必要
- 東シナ海・黄海漁場においては、日・中・韓3国での共同管理が必要
- 産卵場及び生育場となる沿岸域の環境保護が重要